

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2018～2022

課題番号：17KK0030

研究課題名（和文）Ageing and Illness in British and Japanese Children's Picturebooks 1950-2000: Historical and Cross-Cultural Perspectives

研究課題名（英文）Ageing and Illness in British and Japanese Children's Picturebooks 1950-2000: Historical and Cross-Cultural Perspectives

研究代表者

迫 桂 (SAKO, Katsura)

慶應義塾大学・経済学部（日吉）・教授

研究者番号：60548262

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,600,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：日英の児童絵本を主とするテキスト研究を通じて、老い、病い、ケアの文化的言説を考察した。その結果、主体の概念が文化的に形成され、それが介護関係の理解、経験、描かれ方に影響を与える可能性が確認された。さらに、テキストのジャンルや媒体の役割も理解できた。エイジング研究、児童文学研究、エコクリティシズム、ポストヒューマンイズムの視点を接合した研究によって、これらの接合が、ライフコース、世代、未来、人間と人間・非人間の他者との関係性についての理解を豊かにしうることを示した。研究成果を英語で報告・出版することで、日本語の語り作品と日本の老いに関する研究を国外に紹介することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

数多くの日英の児童絵本の分析を通して、老いや病い、さらには、子供と老年者（多くは祖父母）の世代間関係、ケアが子どもにむけてどう描かれ、語られているかをより正確に理解することができた。日英の比較により、これらの表象・語りが、文化的に規定されている可能性も認められた。

以上から、児童絵本は、子どもが老い、ケア、世代間関係、ライフコースを理解するうえで重要な役割を果たしうると言える。これは翻っては、これらのこと、さらに、こどもについて、大人が抱く考え、不安、望みを絵本が投影しているということでもある。

高齢化社会において、このような児童絵本の役割が広く理解されることは大変重要である。

研究成果の概要（英文）：This project considered the cultural discourse of ageing, illness (especially dementia) and care, through a close analysis of British and Japanese picturebooks for children. It has suggested how the conception of subjectivity may be culturally informed and how it may affect the understanding, experience and representation of care and care relationships in specific cultural spaces. The project has also brought into focus ways in which genre and media contribute to the narrativisation and the discourse of ageing and illness. Finally, the project has brought together ageing studies, children's literature studies, and the perspectives of ecocriticism and posthumanism, demonstrating the rich potential of these intersections for our understanding of the life course, generations, the future and humans' relationships to human and non-human others. The research outcomes have been disseminated in English, introducing Japanese narratives and studies of ageing in Japan to outside the country.

研究分野：英文学

キーワード：ageing life course picturebooks Britain Japan illness ageing studies gerontology

1. 研究開始当初の背景

老年学は主に医学、社会政策・福祉分野でなされてきたが、全世界的な人口高齢化に伴い、人文学分野でも研究が活発化していた。人文学分野では「老年学」よりも age/ageing studies の名称が好まれる(本報告書では「エイジング研究」の名称を用いる)。これは、老年学が通常は老年期を研究対象とするのに対し、老年期に限らず、人間の時間における経験を研究対象とする立場、また、年齢が高い低いに関わらず、年齢をアイデンティティーの一要素と捉える立場によっている。エイジング研究の主要な一領域が、高齢化と関連する認知症の研究であった。この動向に沿い、研究代表者も主に戦後・現代イギリス文学作品を分析対象に研究をしていた。主な目的は二つあった。

(1) 表象研究の枠を超え、老いや認知症の文学的語りの批評を、より大きな思想、文化、政治的議論に結びつけること。この背景には、新自由主義思想と資本主義経済の影響が広範な現代社会において、健康で活動・生産的な自立した個人が規範とされ、老年や病い、障がい否定的に捉えられる一因となっている現状への懸念があった。そこで、老いと認知症の文化的言説の根底にある思想・価値体系を、ケア倫理学の視点から検証することで、多様な生の在り方に目を向けることができると期待した。

(2) 文学的エイジング研究では、老いと認知症のテーマ(内容)研究が主流で、作品の形式や社会背景が十分に考慮されない傾向を是正すること。多様な作品を扱い、形式やジャンル、作品の生産・受容背景を考慮して意味解釈を行うことにより、文学作品が老いや認知症の文化的意味生産と流通に果たす役割、さらに、老いや認知症、病いが文学に与える影響を、より深く理解することを目指していた。

2. 研究の目的

上記二つの目的を実現するために、英国ハダースフィールド(Huddersfield)大学所属のサラ・ファルカス氏(Dr Sarah Falcus)を第一共同研究者とした国際共同研究課題二つを設定した。

(1) 課題1: 児童向け絵本における老いや病いの歴史・比較文化研究

認知症者の増加につれて、子供に認知症について教えることを目的とする児童向け絵本の出版も増えている。研究代表者と共同研究者ファルカス氏が2000年以降に主に英米で出版された作品を調査した結果、いくつか発見があった。一つは、祖父母と孫の関係が中心的な主題で、その中で認知症が紹介されていること。もう一つは、認知症の症状の一つである記憶障害、及び、治癒が不可能な事実を、子供にどう伝えるかが最大の関心事となっていることである。また、児童絵本のジャンルの特性として、子供の教育を通じた社会思想の形成・定着の意味合いがあること、視覚情報と言語の共存が特徴的であり、文学形式と老いのテーマの相関関係を考察するのに有効な媒体であることが分かった。上記の実績を踏まえ、本課題の目的二つを実現すべく、下記のように絵本研究の発展を計画した。

考察対象を拡大し、老いやより広義の「病い」とした。また、対象の一次資料を「孫と祖父母の関係」を主題とする絵本に拡大した。この主題は、認知症を扱う作品に限らず、児童絵本で頻りに扱われている。祖父母の人物を通し、老いの様々な面が描かれており、家族、世代、家系といった広い視点から老いやライフコースについての文化・社会理念を考察することが可能になると期待された。

日本の児童絵本との比較研究を取り入れた。日本でも老いや介護に関する児童書が増加している。異なる文化圏で生産、受容される絵本の比較により、老いや「病い」の言説の文化性をより正確に理解することが可能になる。さらに、日本のテキストを扱うことは、エイジング研究の焦点が欧米文化圏におかれる傾向の是正につながると期待した。この傾向については研究コミュニティ内でも問題視されており、本共同研究の比較文化の視点は学術的言説を複雑・多様化するための試みでもあった。

(2) 課題2: 国際学術集会の組織・開催と論文集の企画・編集

Ageing, illness, care というジェロントロジー研究で重要なテーマについて国際学術集会を開催し、これを土台とした研究論文集の企画編集を行う。また、異なる文化圏・言語の文学・文化的語りを扱う研究を集めることで、上述のエイジング研究の文化的偏向の是正を目指す。

3. 研究の方法

(1) 課題1

絵本研究は、テキスト分析を基盤とした。テキスト分析は、児童文学及び児童絵本というジャンル・媒体の特性を考慮しながら、学際的な視点から行った。絵本の出版年の設定は1950-2000年とした。19世紀から20世紀前半のイギリスでは、「児童文学」の捉えられ方や出版形態が大きく変遷しており、それを考慮したうえで、作品の歴史的比較をすることが難しい。さらに、日本

で近代・西欧化が進むのは19世紀後半以降であり、有効な比較をするには歴史的状況があまりに異なる。一方、20世紀後半はグローバル化が進み、先進国の社会状況の共通性も増している。人口高齢化の社会問題化、認知症の病理化と社会的認知度の向上、ベビーブーマー世代による老いの文化の刷新がおこり、老いの文化も大きく変容する期間である。だからこそ日英の比較が意味をもち、老いの意味と経験の文化・社会的側面を明確にできると考えた。また、古い時代と比べて、日英とも一次資料の入手がしやすく、数も多いため、より正確な比較、及び、歴史・社会俯瞰が可能になると思われた。実際には、両国とも、絵本の発行部数が戦後直後は多くないことが分かった。特に、老年者が登場する作品を探すことが難しかった。結果的に、収集した絵本はほとんどが1980年代以降のものであった。

実際のテキスト分析に際しては、ファルカス氏は日本語を理解しないため、収集した日本語の絵本を、研究代表者の英語授業(「Cultural Gerontology」)を履修したバイリンガル学生に英語に翻訳してもらった。ファルカス氏は英訳を参照、研究代表者は原版を参照、適宜英訳を参照した。テキストを特有の歴史文化的文脈に位置づけるために、日英それぞれの児童文学の歴史、子どもについての研究文献も読んだ。日本語の文献の場合は、研究代表者が読み、内容をファルカス氏に伝達した。以上のように、児童文学、絵本研究、子ども研究、エイジング研究の成果を効果的に活用し、学際的な視点から、研究を行った。

(2) 課題2

学術集会開催と論文集の編集には、研究代表者が所属していた European Network in Aging Studies, North American Network in Aging Studies, さらに、運営委員を務めていた Dementia and cultural Narrative Network を通じた研究連携関係を活用した。

4. 研究成果

課題1:

(1) 先行して行った認知症絵本研究において、イギリス・英語絵本の研究はある程度進んでいたため、本課題では、日本絵本の研究を優先して行った。その結果、介護、世代間関係、主体の描かれ方に特徴的な点が認められた。

統計資料では日本における核家族化が認められるが、児童絵本においては複数世代世帯を舞台とする作品が多かった。子どもが世代間関係に強く位置づけられており、それに伴って、介護の義務が明確に描かれている傾向があった。具体的には、祖父母が病気になったり、怪我をしたりした際に、子どもが身体的介助をする場面が、文と画の両方で描かれていた。これは、イギリス絵本にはあまり見られない点であった。特に、身体的な介助が描かれる点は日本の児童絵本に特徴的と思われた。また、絵本にはジェンダー化も認められた。女の子は家の中で母親や祖母と過ごす設定が多く、介護の担い手として期待されている度合いも、男の子に比べて強いと考えられた。

日本の絵本においては、人間の自立よりも interdependence が前面化されていること、身体性も主体の概念の重要な一部として認識されていると考えられた。エイジング研究において、mind/body の二分立から成る主体の概念が問題視されている状況を鑑みると、日本の絵本に見いだされる主体の概念は重要と思われた。一方で、interdependence の重視が、自主性を限定する可能性も絵本に描かれていた。つまり、自己の権利や欲求の実現が、他者に迷惑をかけない範囲でのみ許容されるという示唆が含まれていた。

(2) 以上から、本研究は主に二つの意義があった。

主体の概念は複雑で、文化的に規定されていることを示した。老いの言説を理解するうえで、主体の概念を再検討することは重要である。高齢化社会において、特に、新自由主義的政策や思想の影響が増す社会において、老年者は「負担」と「依存」の意味と結び付けられやすい。この根底には、健康で生産性のある自立した主体を規範とする思想があるといえる。日本の絵本はある意味においてはこれと異なる主体像を提示しているが、主体性のあり方は他者に迷惑をかけないという規範にも制限されているようであった。こうして、自己と他者の関係性は複雑で、異なる文化で異なる在り方をしている可能性が伺えた。

児童文学研究とエイジング研究を接合させ、世代間関係が老いの言説に大きな役割を果たすことを明らかにした。この接合は、Vanessa Joosen を初めとする一部の児童文学研究者によって既に試みされていたが、エイジング研究側からの試みとしては、本絵本研究は最も早いものの一つとなった。この接合は、子どもと大人を対峙する他者とみなすのではなく、両者の関係性に目を向ける方向性を導き出したといえる。子どもも大人も、ライフコースのある地点において、時間空間を移動している主体という意味では共通している。大人はかつては子どもであった存在であり、子どもは将来大人になる存在である。こうして考えると、世代間関係は対立でなくつながりで捉えられる。分析対象となった絵本の多くが、子どもと祖父母の深い関係性を前面化しており、世代間のつながりを描く文学ジャンルとして優れている可能性が確認できた。異なる世代が「他者化」され、世代の分裂がよく問題となる高齢化社会において、これらの絵本の世代間関係の表現は重要といえる。

(3) 世代間関係の考え方は、我々はどのような未来を想像し、実現するかという問い、つまり、環境についての議論においても重要な問いに関係する。ここから、エイジング研究、児童文学研究、エコクリティシズム接合の可能性が見いだされた。実際に、絵本における世代間関係の分析では、世代のつながりが自然環境において描かれる頻度が非常に強いことが分かった。これらの作品において自然は、日常的な時空間の外にある空間、社会規範の外にある空間として描かれ、これが、子どもと祖父母の遊び心に満ちた交流を可能にしていた。もう一つ明らかになったのは、自然の未来と子どもの未来が重ね合わされる傾向であった。この傾向は、環境や政策についての言説において、子どもが持ち出される傾向に通じると考えられた。こうして、エイジング研究と子ども研究の接合は、ライフコース、世代間関係、未来をどう想像するか、つまり、エコクリティシズムにも重要な問いも導きうるということが分かった。

(4) さらに、この問いとポストヒューマニズムをつなぐことにより、その思想や批評がエイジング研究に貢献する可能性を示した。科学技術の進歩の結果の一つとして、人間と非人間の境界を曖昧になったことが言われる。クリティカル・ポストヒューマニズムと呼ばれる思想的動きでは、西洋のヒューマニズムの伝統の核にある人間中心主義 (anthropocentrism) を見直す試みが行われている。この思想的潮流においては、そもそも「人間の」ライフコースとは何か、が問い直されることになる。よって、我々が未来について考えるとき、人間の世代間関係だけではなく、非人間の他者 (モノ、環境、AI 等) との関係性も考えなくてはならない。共同研究では、この関係性を探究する最適な文学ジャンルとして SF に注目をした。SF 作品は科学技術革新が悪い方向に進んだディストピア的未来を描き、現実社会に対する批判や警鐘を伝えるものが多い。そこで、具体的な作品 (Kazuo Ishiguro, *Klara and the Sun*) を読解し、子ども、世代、ライフコース、未来、人間と非人間の関係性がいかに描かれているかを分析した。その結果、SF ジャンルが、エイジング研究にポストヒューマニズムの視点を導入し、エイジング研究に多くの示唆をもたらさうるジャンルであることが示された。

上記の研究成果は、国際学術集会での報告、図書 (下記の課題 2 の成果物含む) での出版を通じて、広く発表した (5 「主な発表論文等」参照)。

課題 2 :

(1) ファルカス氏と共同で学術集会を開催 (2019 年 9 月、於: Huddersfield 大学) した。基調講演者として、Dr Sally Chivers (カナダ Trent 大学)、Margaret Gullette 氏 (米国 Brandeis 大学)、Dr Amelia Defalco (英国 Leeds 大学) を招聘した。招待発表者として、Dr Aagje Swinnen (オランダ Maastricht 大学、European Network in Aging Studies 初代会長)、Dr Raquel Medina (英国 Aston 大学) を招聘した。二日間の会期中、複数の国・専門分野 (演劇、映画、音楽、フランス研究など) からの研究者が参加し、エイジング研究分野の研究連携関係を促進することに貢献したといえる。

(2) 本集会を土台とした研究論文集の企画編集を行い、*Contemporary Narratives of Ageing, Illness, Care* (Routledge, 2022) をオープンアクセス出版した。コロナ禍のため、対面ではなく、オンラインの国際学術集会にて執筆者を集めて刊行を記念するイベントを行った。出版準備が世界的な COVID-19 の流行と重なり、奇しくも、論文集のテーマの重要性が際立つ結果となった。多くの社会で、ケアについて、他者との関係性について再考がされ、議論がされる際に、論文集に収録された研究成果が少しでも役に立つことを期待する。

(3) エイジング研究の知名度を日本国内で高めるために、日本英文学会関東支部の 2020 年度秋季大会にてパネル講演を企画した。これには、ファルカス氏とウォリック大学英語比較文学科のエリザベス・バリー氏 (Dr Elizabeth Barry) を招聘し、慶應義塾大学法学部教授 (当時) の武藤浩史氏を招待し、準備を進めた。日程を決定し、支部のウェブサイトで発表要旨と共にイベントのアナウンスもしたが、コロナ禍により、海外からの招聘が困難になった。オンライン開催だと研究者交流の意義が薄れることが懸念されたため、延期をした。翌年度に開催を検討したが、参加予定者の都合が合わず、企画は中止した。日本国内でエイジング研究の研究者交流を行うことは今後の課題として残った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Katsura Sako and Sarah Falcus
2. 発表標題 'Intergenerationality, Age, and Environment in Children's Picturebooks.'
3. 学会等名 European Network in Aging Studies and North American Network in Aging Studies Joint Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sarah Falcus and Katsura Sako
2. 発表標題 'Children, care and the posthuman future in Klara and the Sun.'
3. 学会等名 16th Conference of European Society for the Study of English (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsura Sako and Sarah Falcus
2. 発表標題 Book Launch: Sarah Falcus and Katsura Sako (eds.), Contemporary Narratives of Ageing, Illness, Care (Routledge, 2022).
3. 学会等名 Women's Narratives of Ageing and Care (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsura Sako and Sarah Falcus
2. 発表標題 'Care and the child-grandparent relationship in children's picturebooks in Japan'
3. 学会等名 9th International Health Humanities Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katsura Sako
2. 発表標題 'Dementia, familial care and the politics of nostalgia in Japanese cinematic narratives.'
3. 学会等名 Ageing, Illness, Care in Literary and Cultural Narratives (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Sarah Falcus and Katsura Sako, 'Ageing, Time and Space in British and Japanese Picturebooks.'	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Palgrave	5. 総ページ数 -
3. 書名 Valerie Lipscomb and Aagje Swinnen (eds), Palgrave Handbook of Literature and Age	

1. 著者名 Katsura Sako and Sarah Falcus (eds)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 216
3. 書名 Contemporary Narratives of Ageing, Illness, Care	

1. 著者名 Katsura Sako and Sarah Falcus, 'Care, Generations and Reciprocity in Children's Picturebooks in Japan.'	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 216
3. 書名 Katsura Sako and Sarah Falcus (eds), Contemporary Narratives of Ageing, Illness, Care	

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際シンポジウム報告
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/research/kiban/doc/kibaneventreport20191106.pdf>
 慶應義塾大学教養研究センター基盤研究 関連するイベント
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/research/kiban/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ファルカス サラ (Falcus Sarah)	ハダースフィールド大学・Department of Communication & Humanities, School of Arts and Humanities・Reader	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
Ageing, Illness, Care in Literary and Cultural Narratives	2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
United Kingdom	University of Huddersfield		